町人文學

藤村作

PL
726
.4
F8

Fujimura, Tsukuru
Chonin bungaku

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

國史研究會編輯　岩波講座　日本歷史

町人文學

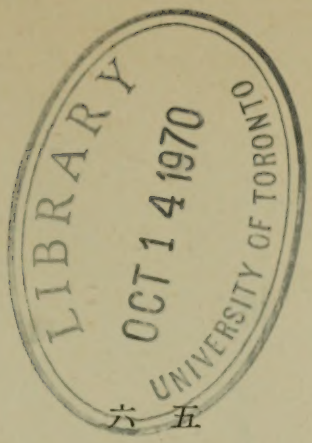
藤村作

岩波書店

町人文學

藤村作

PL
726
.4
F8



目次

一　序說（町人文學と寫實性）……三
二　物語小說等に於ける寫實の史的概觀（平安時代物語より江戸時代假名草子まで）……五
三　物語の空想化と新寫實の萌芽（假名草子と古淨瑠璃）……七
四　浮世草子、淨瑠璃の新寫實（西鶴と近松）……一三
1　西鶴が寫實の特徵
2　近松が寫實の特徵
五　江戸文學の寫實（洒落本、滑稽本、人情本）……二五
六　空想的又理想的文學と寫實性……三七
1　淨瑠璃時代物と寫實性
2　讀本と寫實性
七　韻文學中の寫實の一瞥（特に川柳に就いて）……四四
八　結　語……四七

一　序　說（町人文學と寫實性）

こゝに町人文學と稱するのは、江戸時代文學の大部分を占めてゐるものである。町人文學の持つ價値は、その寫實性の上に在る。有るが儘の彼等の生活を描いて人間性の眞實を寫出した、その寫實の優秀なる上に在る。高尚な理想の表現もなく、又健實な道德的教訓の力もなく、人を魅了する詩的空想もなくして、なほ國文學史上に、特色ある一時代文學として、多くの頁を割かれてゐるのは、右にいふところの寫實性に優秀なるものがある爲である。抑〻寫實主義は、浪漫主義、理想主義に對していはれるところの、小說物語、劇等の作者の創作態度である。浪漫主義、理想主義が理想や空想の人生を取扱つてゐるのに對して、現實を有りのまゝに描寫しようとするのが、この寫實主義である。さうして、これにも亦、皮相的な、外面的人生の寫實もあれば、心理的な、自然主義的な寫實の如き、內面的人生の寫實、客觀性の確持に依る精密な寫實もある。我が國に於て、寫實主義といふ語の用ひられたのは、明治の中葉をその始めとするが、文學、藝術上に於ける寫實性は、既に遠く中古時代に在る。或はなほ溯つて上古時代にあるといふことも出來る。これを藝術論、文學論の展開中に探つて見ても、少くとも、紫式部が源氏物語螢の卷中の言、世阿彌の能樂說中の說、なほ降つては、難波土產傳ふるところの近松門左衞門の淨瑠璃の說等に見る。

この寫實主義はどういふところに起るかといふと、社會の秩序、平和が維持され、文化の成熟した時代に於て、人人が現實に滿足し、現實を謳歌してゐるところに起るものもある。又却て現實に不滿をおぼえ、現實をより一層よいものにしようと望むところから、現實をよく知らう、見直して見ようとするところに起るものもある。

文學價値の上からいへば、より高いものは、後者の方に多いといへようが、それは現實を不備と見、既に不滿をおぼえてゐる作者の手に成るが故に、人生の美醜を併せて寫してゐる。中には自然主義文學の如き好んで醜を寫したものもある。そこで往々その點で浪漫主義、理想主義の文學の美なるもののみを取扱つてゐるものに較べられて、道德的、社會的の見地から、非難攻撃を受けることがある。併し前者といへども決して道德的、社會的に見て健全であるとはいへない。時代の惡傾向を不知不識の間に、謳歌してゐるところに道德的、社會的に忌むべきところを見出すことも少くない。それが人生の皮相に止つてゐた場合に於ては、殊にさうした感じが深い。

そこで町人文學を一般に見ると、そこに浪漫性、理想性も相當に多く見出される。それが遊戲的傾向と結合してゐるところに、一層不穩な性質を多くしてゐる。が、寫實性は比較的眞面目であつて、町人文學の本質、特質は寧ろその方面に在るといへるのであるが、それにも亦時代的の展開が見られる。さうしてその間に、浪漫主義、理想主義のものと同じやうに、時代人の享樂的、遊戲的傾向に累されて、寫實の眞摯な態度が汚され、町人文學をして低級卑猥ならしめてゐる弊がある。

この時代の作者は、創作に對して十分の自覺を持つてゐなかつたので、彼等の態度を寫實主義といふのは穩當を缺くから、こゝには町人文學の持つ寫實性としてこれを說かうとするのである。

二　物語小說等に於ける寫實の史的概觀

（平安時代物語より江戸時代假名草子まで）

平安時代以來の物語の流れを概觀すれば、既にその出發點に於て、空想的なるものと、寫實的なるものとの二流がある。竹取物語や、空穗物語俊蔭の卷などに空想的なるものを見ると共に、落窪物語、源氏物語、狹衣物語などに寫實的なるものを見るのである。さうして又竹取物語や俊蔭の卷の中にも寫實的性質は含まれてをり、他の寫實的なものの中にも、全く空想的乃至理想的性質を含んでゐないとはいへないのである。が、平安時代の物語の大きな流れは寫實的なるものに在つたことは疑はれない。この大勢は現實の生活を情趣的、美的に享樂してゐた當時の貴族達の精神、その貴族達の生活と密接な關係を持つてゐたのである。さうして世界的の誇りとする源氏物語も、亦よく人間の眞を寫出したその寫實性に不朽の價値があるのである。

源氏物語の寫實的物語が餘りに偉大であつたので、爾後の物語はその摸倣追隨となつてしまつて、新しい展開は長い間これを見ることが出來なかつた。唯僅かに、說話文學と軍記物語とに、異なる文學の領域を見出したに過ぎない。その說話文學は多くは空想の中に文學の世界を探り、軍記物語は平安以來の貴族の現實の物語とは別の方面即ち武士の方面に題材を見出したものである。それで軍記物語も寫實以外の文學とはいひ難い。

そこで、鎌倉室町時代に於て、物語小說的な文學が二途に分れた。一は物語系の寫實的なる流れ、他の一つは說話

文學系の空想的なる流れである。鎌倉時代はこの二つの流れが、劃然と分れてゐたが、室町時代になると、空想的なる說話文學系の謠曲能の中に、能の狂言が出來て、寫實的性質を多分に取り入れた。これも舞臺上の實演には、純寫實的なものは少いが、その詞章卽ち文學的なるものには、頗る寫實的なるものが多くなつてゐる。それから御伽草子と後世いふ所の物語の短篇物には、戀愛物、繼子物などの寫實的なものと共に、本地物、英雄物などに空想的なるものが甚だ著しい。かうして、この時代には、同一の文學形態の作品中に、寫實的なものと、空想的なものとが、併存してゐる。これは平安時代の舊態に歸つたともいへるし、又近世に於ける文學現象の先驅ともいへる。

近世に入つて、元祿以前の啓蒙期にこの種の文學としては、所謂假名草子があり、古淨瑠璃がある。これらは多分に空想性を持つものであるが、彌〻近世の新文學卽ち元祿文學の時代に入つても、この流れは浮世草子中の八文字屋本と淨瑠璃の時代物の中に流れてゐる。さうして中期以後江戸を中心とする文學には比較的少くなつてゐるが、なほ讀本と草雙紙にこの性を持續してゐる。

一方寫實の流れは、主として新文學の先驅たる浮世草子の西鶴本から面目を改めて、淨瑠璃の世話物と相並び、世話歌舞伎を伴うて、中期以後の洒落本、滑稽本、人情本等の江戸文學の主なるものに入つて、大きな流れをなしてゐる。

それから明治時代に入る。明治時代に於ては、舊風寫實の流れの中に、西洋の影響を受けて、理論と創作の實際の上に新寫實を發生して、新舊の併立から、次第に新寫實の展開をなして、而して自然主義の勃興に至つて、こゝに現代文學に連續してゐる。

三　物語の空想化と新寫實の萌芽

（假名草子と古淨瑠璃）

室町時代の御伽草子、江戸時代初期の假名草子は、なほ平安時代の物語の系統を承けて、その樣式、手法を繼承してゐるので、一見寫實的であるやうではあるが、併しこの頃は次第に、作者の住んでゐる世界と、取扱つた作中の世界とが間隔を生じて、作者自身の體驗を書き、又は作者自身が周圍の觀察から、直接に材を得たものではなく、多くは古來の物語などを通じて知つてをり、想像してゐるものから、空想して作り上げた世界である。それであるから、寫實的なる平安時代の物語と甚だ類似してゐるにしても、作者の態度からすれば、寫實的といふよりは、寧ろ空想的であるといふべきやうになつてゐる。それは既に作者と階級が違ひ、生活の樣式が違ひ、思想感情も必ずしも一樣でない他の階級の生活を取扱ひ、他の階級の人物を寫さうとしたものであるから、假令如何に有りの儘を寫さうと期したところで、どうしてもそこには空想、想像で、細かい所を書き、辻褄を合せることになつた筈であるから、平安時代の作家が、自己の屬した階級なり社會なりから、題材を得て書いたのとは、同一の寫實となり得なかつた筈である。そこに寫實を套襲摸倣しながら、空想的にならざるを得なかつた所以がある。作者自身は忠實に現實を寫實してゐる積りであつても、そこに空想的になつたといふものある以上、これを純粹なる寫實とは見ることを得ない。室町時代の御伽草紙の戀愛物にこの事が見えてゐるが、江戸時代の假名草子の薄雪物語や、恨之介などにも亦同樣に見られ

る。彼のおほらかな、優美な貴族的な戀愛生活は決してその當時の作者が、自身の經驗や、周圍の觀察から得たものでない、これは物語の古い傳統の世界として空想されてゐたものに相違ないのである。

恨之介の筋を見よう。慶長九年の夏の末、葛の恨之介といふ色好みの男が清水に詣でて一人の美女を見染めた。それより觀音に祈つて四七日の曙に、下京なる服部の庄司が後家をたよらば必ずその戀成就すべしといふ御夢想を得たので、恨之介はこの寡婦を訪ねて、美人は木村常陸の女で、近衞殿に仕ふる雪の前といふものであることを知り、この寡婦に文を托した。寡婦は近衞家に行き、あやめの前を經て、その文を雪の前に届けた。この戀情を綴つた文が下卷の首に在る。雪の前は返書を送る。この文に書いてある古歌や詩句の意が恨之介には解されなかつたので、細川玄旨に仕ふる宗安に讀んでもらつて始めてその意を知つて喜んだ。以來數次書信を通はし、遂に八月十五日の月見の宴の夜、恨之介は寡婦を手引にし、女裝して近衞邸に忍び行き、始めて雪の前に逢うた。所がこれを限りに又逢ふ機會もないので、恨之介は病氣になつてしまつた。友人等は爲に雪の前を盜み出さうとしたが、恨之介は之をとゞめて遺書を書いて嫗の許に送つて死んだ。嫗も之を見て悲歎の餘りに死んだ、後家もこれが爲に自殺し、あやめの前も自殺し、紅（くれなゐ）といふ女も死んだ。かういふ筋である。筋だけを見れば、決して現實にはあり得べからざる事ではない。けれども終の悲劇の條の如きは、あり得べきとしても、それは極めて稀にしかあり得ないことである。次に嫗の容貌についてその美を寫した一條を引かうと思ふ。長きに失する嫌はあるが、已むを得ない。

……其中に取ても、琴をしらべておはします、上﨟の御姿をみてあれば、年の程十五六と見え玉ふが、紅の千入（もしほ）の袴を踏しだき、はだには何をかめされけん、上には白き綸子に、色々の絲をもつて、ものの上手が縫たりけり。御上前（うはまへ）のくだりには、戀をするがの

富士のねを、うき雲のおびと也、とかんとすれば結びもなく、煙は空によこおれて、かぜになびき、高ねの雪も消やらで、すその は茂る山なれば、紅葉ふみ分啼くしかの、妻とふ聲に哀ます、扨分方より後には、羽衣の松縁にて、よはひは君が例かや、さて又すそのけまはしには、浮島原、田子浦、あまのつり舟ほの見ゆる、磯うつ波のはげしくて、波にただよふ濱千鳥、げに有々とぬはれけり。さて帶のけつかうには、吳郡の綾にすりはくし、其あひ〳〵に秋ののに、草づくしをぞ縫れたる、ひすひのかんざしは、あたとたをやかにして、楊柳の風になびくがごとし、かつらのまゆはあをふして、せいたいが立板に、水を流すにことならず、宛轉たり一双峨は、遠山の月にあひおなじ、又鶯舌のさえづりは、露をふくめる絲萩の、かごと許に咲初る、花よりも猶いつくしや、袖うちはらふ雪の下、紅顏きんしうのよそほひ、畫工が繪にはうつすとも、筆にはいかで及ぶべき、物によく〳〵たとふれば、唐のやうき妃まやぶ人、ぐし君りふじん星のみや、越の西施、あしゆくぶにん、かんのちうたん、ごすいでん、毘沙門の妹に吉祥天女、臘月夜の内侍のかみ、染殿の御后、かの野の宮に住み玉ふ、御息所に葵の上、和泉式部、小式部、紫しきぶに小督の局、紀の有常が息女かや、義經のおもひしは、靜御前や上るり姫、その行平の中納言の、三年をちぎる松かぜや、村雨又は妓王妓女、用明天皇の、心をつくさせたまひける、まの殿の獨り姫、さて在五中將の、思玉ひし二條の后、そがの十郎祐成が、契を籠めし虎御前、しゞどの四郎が思ひける、きによの女、あはの流門にて、かのみちもりに別つゝ、恨に沈し小宰相、無官の大夫敦盛の、御室の御所にて見初しより、しづ心なく戀にせし、あぜつしの大納言すけかたの四の御息女、げにやおもへば深草の、四位の少將の遺ひける、小野の小町や玉もものまへ、あやめ眞こもに常はのまへ、佐藤庄司が次男の忠信と、同じよみぢとなりたりしあんじゆのまへ、りきじゆ御前さよひめ立田ひめ、ほとけ御前、たいしよくはんの弟姫、江口の君に千手のまへ、雪姫遊やの長とかや、鬼がむすめの十郎御前、きしほの卿の妹に戀死の女、こんよの姫に中將姫、をよそ源氏に見えけるは、桐つぼはゝきぎわか紫、紅葉の賀、花の宴、葵さかき花ちる里、篝磨明石澪標、六十よ帖の物とても、是にはいかでまさるべき、

この後半部の文は、空想的な美人の形容である。かういふ文から得る我々の印象は單なる空想的な美人であつて、現實の女としての特殊な人物を想像することは出來ない。但し前半部の文には寫實的なるものがあると見られる。現

實の實際に見らるべき服裝として思ひ浮べられるのである。かうして同じ文章の中に、一方には空想的、他方には新しい寫實的といふやうに、二樣の態度の交ることは注意すべきである。このことは獨り恨之介についてのみいふべきことでなくして、他の多くのものにもいへる。

浮世物語もよくこの例に引かれるものである。浮世物語は小說ではないので、全體が寫實から出來てゐるとはいひ難いが、例へば卷一の六の「傾城ぐるひ異見の事」の一條の如きを見ると、よく當時の生活の一面を如實に寫し出してゐるものとして讀まれるのである。遊里の風俗、遊客の樣子などが、後の寫實的な純町人文學の浮世草子の寫實的手法を用ひて、よく描寫されてゐる。こゝまで來れば、町人生活の純寫實たる町人文學へは、もはや一步といへるのである。次にその全文を引くこととする。浮世物語は淺井了意の作で、寬文十年版である。

今はむかし、瓢太郎にあらぬやまひのつきて、かの島原にかよひそめけるほどに、わが家をばさらぬよしにて立出つゝ、道にて步荷物の乘物をかり、これに打のりて大宮をくだりに、丹波街道を島原口までゆきいたり、こゝにて乘物はかへしつゝ、編笠引こみ、衣紋の馬場噂町をうち過、あげや町にさしかゝり、やがてあげやの中二階にかけあがり、日比知音の太夫にあひて、ある時は口舌をしいだし、大にふられて馬をつなぎ、又ある時は後の世までとかたらはれて、命を塵とも思はず、太鼓衆にうちはやされて、鼻のさきうぞやきうご〳〵としてわらひどよめき、日ごとに通ふほどに、金銀をつかふ事水のごとく、親のたくはへをきたるものども、おしげもなくつかひくづしもちはこぶ、あまりに興じて、後は人めをもつゝまず、袖のなり大そぎにそぎて、つまたかく引まはし、はゞのひろき帶うしろにむすび、たゝき鞘の中わきざし金鍔をきらめかし、うねざしの踏皮にぼたんをいれ、席駄をならして出たちける有さま、さかやきは耳のもとまでそりさげ、鬢うすく鬢くひそらし、藺柄の大あみがさまぶかに引こみたれば、そのなりふりよしとやいはんあしくとやいはん、殿中風のたゞなかなり、親類兄弟たち見ぐるしがりて、ひそかに異見をせられけるやう、このほどけしか

らず行通ひ給ふところ、よく〳〵きけば島原とかや、あらぬところに立いり給ふこそ、よからぬことなれ、もとより傾城は身をつくろひすがたをかざり、なさけの色をふくめるものなれば、心をかたぶけて思ひしむはことわりなり、柳の髪たをやかに、花のかほばせうるはしく、まゆずみの色は遠山のみどりの木ずゑにことならず、あかくえめるくちもとは、初めてひらく芙蓉の花、みがける齒は白くして、さながら雪のごとく也、あし手ほそらかに、から撫子のませのうちにもえいづるにことならず、腰もとたをやかにして、絲を束しごとくにして、空だきの匂ひあたりにみち、ゆるぎ出たる有様、まことに勝もちの彌陀によらいかとあやしまれ、宿の子もちがすがたによせては、中々麗ぐちて八月ごろの指鯖の心地ぞする。さればこそこれにあきはてかれを忘れかね、又ゆきて逢ぬれば、谷の戸を出るうぐひすの、はつねをほろの聲をいだし、又きさんしたかはやういなんしなどいへば、この御言葉の有りがたき、いかなる和尚の一句提講携のしもしも、これにはまさらじと思はれ、ちかく立よりとかくかたらへば、したしきやうにしてうちとけず、氣の毒なるやうにて挨拶おもしろく、三味線を引よせて、つるてんと引撥ねと、頓て買手をあがり鯵にせんといへる、ひやきあるぞゆゝしき、聲うちあげて一曲をうたへば、心もうきたち、歌のこゑともに有頂天になりつゝ、明日はゑんぶのちりともなれ、わざくれ浮世は夢よ、白骨いつかは榮燿をなしたる、これこそ命なれ、その盃これへさゝんせよといへば、筒のごとくなる御手にてさし出し給ひて、ひとつのまんしといはれたるは、あつたものではないと、うかれ〳〵てまどひはつろ、龜屋の何十郎とかや、さしも稀に名だかきうとく人、傾城ぐるひをいたせしが、その妻斉姮して、われもさらば傾城をかはんとて、夫婦のもの毎夜二人の太夫をよびて、ときのためには半夜がこひ、御前座頭をよびあつめてうたひどよめきて、程なく一跡をたゝきあげ、今ほどかの何十郎殿は、都のすまひもならず長崎にゆきて、日用の手間とりて世をわたらるゝと聞し、その外いにしへ今、あまたのまどひもの、あるひは傾城をさしころして自害し、又はつれてにげりつゝ、後にみつけられて身をほろぼせし吉野屋の何がしとやらんいふもの、家は闕所になりぬ、その外あげ錢につまりて桶ぶせになり、ぬすみしてかうべをはねられしともがら數しらず、そのはてのよきはなし、金銀なければ直たかき道具をしろなし、つゐに家を棒にふりて、柿染のかたびら一枚、やぶれ紙子一重なりては、中々目も見かけずなりゆくは、今のことぞかし、思ひとぢまり給へといはれける、瓢太郎聞て、かゝる仰こそ有がたけれ、今より後は不通ときいるまにとて、こと

くしく誓文を立てて、宿老をばかへしつゝ、その足にて又島原にゆきけるが、つゐにはみなたゝきあげて、かのてつるてんのすりきりとこそ成にけれ、

かく假名草子の中には、古い物語の古い生活の空想化と、新しい當代生活の寫實とが一緒になつて居ることを見る。これから空想化した一面を取り去れば、やがて新しい寫實の小說が生れ出づべきことが豫想される。

次にこの頃の淨瑠璃卽ち古淨瑠璃に移る。古淨瑠璃も假名草子と同じく、敍事的であつて、描寫的なるものが少い。さうして、空想と寫實とが相半ばするのである。最も古い「淨瑠璃十二段草子」は義經と淨瑠璃姬との情事を綴つてあるが、藥師の信仰に依つて立案してあるので、空想的な要素が多い。のみならず、華麗な修辭を用ひた抒情詩風の性質もあつて、純粹な寫實的な態度から出來たものではない。「阿彌陀の胸割」は所謂本地物で、佛敎傳說に據つたもので、その空想的性質に富めることは言ふまでもない。外題の意の阿彌陀の像が、信者の身替に立つて、その爲胸を割かれて生膽を取られた筈の信者は無事で、阿彌陀の胸がそのかはりに割かれて血を流してゐたといふのからが、荒唐不稽の空想である。

その後の江戸淨瑠璃を見ると、詞章の傳はるものもあり、外題のみの傳はるものもあるが、「淸水の御本地」「阿彌陀の本地」「日蓮記」「酒呑童子」「六孫王魔退治」「梵天國」の如きは、本地物か、それに准ずべきもので、空想的なものであることはよく知られるが、その他の義經傳說物、曾我傳說物の類も決して純粹な寫實的なものではない。

かくして、小說の方も語り物の方も、この時代を概括して見れば、寫實、空想乃至理想の一方に徹せず、兩者を併せ、それを調和させるといふ所に方向を取つてゐる。そこに古典文學に通じてゐる一脈もあり、新文學の領域を開か

んとする傾向も看取される。

四　浮世草子、浄瑠璃の新寫實（西鶴と近松）

1　西鶴が寫實の特徴

浮世草子を物語小説の發達の歴史、寫實の展開の歴史の中に見ると、新しい題材、新しい精神、新しい寫實の手法、新しい文體を以て現れた著しい現象で、こゝに物語小説史は劃然たる區劃を成したものである。

さて浮世草子の名義について議論のあるやうに、浮世草子は單に現實實際の生活を寫實的に描いたものとばかりはいへないが、併し概してその傾向を取つたものである。而して殊にその初期に在つては、好色界、花柳界を寫したところに、當時色の世界を浮世と稱したところに、浮世草子の名義が、狹く好色本とも解されるのである。

浮世草子は慥かに好色本に始まつたが、さてその好色本といふのも、その題材なり、形式なり等から分類すれば、隨分種々に分けて見なければならないが、こゝにはそれには及ばずに置く。さてこの好色本の持つ寫實性の特徴を考ふるに當つては、是非その由つて起つた原因に就いて考へて見なければならない。西鶴が「好色一代男」は浮世草子好色本の元祖といはれるものであるが、これには好色生活の種々相を描いてあると共に、個々の遊女の特徴と、それぞれの遊里の特殊なる習俗とを寫してある。その中のことは、西鶴が體驗や、見聞から直接に得て來たものでもあらうが、遊里の風習と、遊女個々の描寫には、本書に先だつて世に出た、花柳書に得たところがあることは否定し難い

ところであらう。それは遊里、遊女を描いた點をいふばかりでなく、一歩進んで考へれば、それから得た寫實の特徴があるのである。

明暦元年の難波物語、萬治三年の吉原鑑、延寶年間の難波鉦（後好色嚢粟鹿子、又諸分店卸）などには、遊里の風習が書かれ、遊女個々の評判も見えてゐる。これらと一代男とを比較すると可なりの距りが見られるが、更に延寶年間の「たきつけ草」「もえくゐ」「けしずみ」に至ると、遊里好色の世界に於ける粋、遊女の手管といふやうな穿ちが見えて、一代男との間の接近が見出されるのである。又延寶の島原遊女の評判記「朱雀遠目鏡」貞享の「朱雀信夫摺」を見れば、それ〴〵の遊女の個人的特徴を可なり描寫的に說明してある。今一例を「朱雀信夫摺」の巻頭の唐土の條に取る。

こがるゝ〳〵見てぞこがるゝ花の顔。以爲のきざし其根ふかく濡の諸分源遠し。眞盛なる女郎容色そこから清らにして六根便嬛。愛興あるめもと世界の戀のやどり。うす皮にして清ければ色あひ櫻の房にことならず。品よき御髪のかゝりは。唐墨にちやんを流したるも是にはいかに。頭形よろしうして。ゆひぶり分て一風そなはれり。姿の科物なる所は女郎花の露をおび。青柳風にそよぐにたとへてもまだ不足なり。先外相のうはべ。前後左右からみて申分なければ。面向不背の女郎なりと。諸の智者たちのさたし申さるゝ也。座敷つき愛相のつかみ取也。氣だてよし。床入前の唐土が夜雨の美景も及事なし。それは〳〵どうもいへず。諸男感情を催し、えこらえぬ以爲これなり。いふも筈ながら手跡酒の興よし。難に云く。床の景に美つくせるゆへか。持病につかえあり。第一炷にしてなやめる事繁し。さい〳〵引こもらるゝ事親方のため氣の毒也。此人皮膚圓滿にて〇〇ならば。かゝる大臣の頷で蝙をおはぬはあらじ。又は毛ぶかき人也。ぬかせらるゝに御氣がつきる。……

遊女評判記は、文學を創作する意識を以て書かれたものではない。多少さうした態度の交つてゐることは肯定され

るが、實は遊里の手引の性質を多分に持つてゐるものである。故にかゝる說明、描寫の目標は、遊女等の個人的特徴にあつた。その點に知を誇り、又その點に手引の實用的效果を期待したものである。

西鶴はこれと同樣なことを好色一代男に先だつて延寶九年の俳書、「俳諧女歌仙」に書いてゐる。その書中に四人の遊女があるから、その中から吉野太夫の條を一つ引いて見よう。

京三筋町のゆふ女なり。よろづの業にかしこく、歌の道にも心をそめ、いやしからぬ太夫とて、うへ人にもあいなれし事ぞかし。古今まれなる美形、色里の風俗是よりよき事をうつして當世のよね迄も

色姿我身も風の櫻かな

とある。精粗の差はあるが、この遊女の個人的特徴を素描の上に見せようと期してゐることは遊女評判と殆どかはらないことは明らかである。

いづれにしても個人的特徴を寫し出さうとした寫實的傾向が、そのまゝ好色一代男に入つて、その遊女達の個性描寫の上の寫實となつてゐると考へる。

一代男の後半部には、現存した優れた遊女達の名が多く見えてゐる。さうして、これらの名は決して單なる名のみの一致でなくして、作者はそれらの實在の遊女をモデルにし、又は事實をその儘取つて綴つたものである。このことは色々實證を擧ぐることができる。その遊女達といふのは、島原の吉野、三笠、藤波、初音、野萩、高橋（前の）、高橋（後の）、薫、吉崎等。新町の夕霧、御舟、和州、吾妻等。吉原の吉田、高雄、小紫等である。西鶴のこれらの遊女の描寫を見ると、

石上ふるき高橋におもひ懸ざるはなし。太夫姿にそなはつて、顔にあいきやう、目のはりつよく、腰つきどうもいはれぬ、能所あつて、まだよい所ありと、……人語りぬ。そふなふてから、髪の結ぶり、物ごし利發、此太夫風義を萬に付て、今に女郎の鏡にする事ぞかし。

と、こゝまでを見れば、殆ど遊女評判記と違ひはないといへよう。これを今一歩進めて、具體的な事件に依つて描寫することにしてゐる。卽ち或初雪の朝のことである。この高橋が上林といふ遊女屋の遊女を交へて、代之介を正客として、壺の口切をして茶の湯の遊をした。茶席は揚屋の二階を圍つて作つた。床の懸物はわざと白紙を裱具したのを懸けて置いた。水は宇治橋三の間のを用ひ、やがて客が揃うて、高橋から當座の連句を所望し、銘々書きに懸物に五句目迄書かせた。その後酒宴となり、醉も大に回つた頃、代之介が戯に金銀を紙入から打開けて、兩手に掬ひ、「太夫頂け、やらう」といつた。太夫としては金銀を衆人の前で貰ふもしいことはされぬのが當時の風習であつたので、他の遊女達迄迷惑がつて、赤面してゐると、高橋はしとやかに、打笑ひながら、「いかにも頂きます」といつて、傍の丸盆に受けて、「人の前で頂くのも、陰で密り手紙で御無心申すのも同じ事」といひ、禿を呼んで「なくては不自由なものじや、取つて置け」といつてその儘渡した。かく咄嗟の際にも狼狽せず、巧みに處置する怜悧さと、大膽とを有する女であつた。又その日の暮になつて、丸屋といふ揚屋から、尾張のお客の約束があつて、迎へが度々來た。それで高橋は「勤めの身の悲しさ、一寸行つて斷つて來ませう」といつて、その座を立つに當つて、自分が中座する間の細々の注意を人々にして置いて行つたが、又立戻つて來て、不在中代之介へは小盃で進めろと命じ置いて出て行つた。かうした細々とした注意も、その怜悧から來たのであらう。さて丸屋に著いても、直に尾張の客には出ず、臺所で、

代之介への長々しい手紙を書いてゐた。丸屋の亭主夫婦が早く出てくれと頼む。それも構はず書いてゐると、幇間共が伴れに來た。すると彼女は「そんな性急な人に逢うても面白くない」といつて、代之介の處へ歸つてしまつた。丸屋から幾度使が來ても、もはや梃でも動かなかつた。代之介が行けと勸めても、「今日はどんな事があつても行かぬ」と強情を張つた。そして尾張の客もこの儘には濟ますまい、私を引きずりに來て、體は半分に切られてもこゝは動かぬといひながら、代之介の膝を枕にして投節を謠うてゐた。案の如くそこに尾張の客が拔刀を手にして飛び込んで來たが、彼女はそれには目もくれず、聲も震はせず、歌を謠うてゐた。かういふ具體的な描寫があるので、遊女評判記より一歩進んだ立派な文學としても立ち、又その寫實も一段の進歩を示してゐるのである。

これは西鶴の一例で、この種の例は他にも澤山擧げ得るが、繁冗を厭ふから略して置く。さてこの一例から考へられるやうに、個々の遊女の特徴を實用的に、兼ねて趣味的に書いた遊女評判記に導かれて、西鶴の好色本が人間殊に女性の個々の特徴を寫實せんとした所に、自然に物語小說文學の一進展を成し遂げしめたのである。從來の漠然空想中の人間を描き、型の人物をのみ寫したのに對してそこに寫實そのものの一進歩があり、なほ又西鶴の寫實の一特徴が存するのである。

これと共に、西鶴の寫實の他の特徴は、從來は人生の美なる方面、人間の明るい方面をのみ取扱はうとして、その反面の醜なる方面、暗い方面には、多く目を反けて、單に前者の對照としてのみ取扱ふ風のあつたのに、彼は醜惡なる方面にも躊躇なくその筆鋒を向けて、好色本には人間の性慾を、町人物には物慾を、而して本朝二十不孝や本朝櫻蔭比事には、種々なる惡を主として取扱つてゐる。かゝる醜惡なる方面にも、忌憚なき寫實を試みたところに、亦從

來の寫實になかつた方面を開拓したのである。

以上の二つの特徴は、西鶴の寫實の對象が、從來のものと違つてゐると見ての特徴であるが、その手法の上の特徴を見ると、よく現實の實際に卽して、決して空想や想像で捏ち上げないといふところに在る。從つて在來の詩的、文學的なる描寫表現を離れて、知的なる描寫をも、又一面からいへば、卑俗なる表現を厭はないのである。それ故に古典文學に慣れた眼よりすれば、西鶴の藝術は、卑俗猥雜とされるのである。物語系よりすれば、異端的なる存在であらねばならなかつた。而して見方をかへて、人生の表現としての文學の發展の立場からすれば、飛躍的なる物語小說の發展でもあるのである。

西鶴が、寫實にかゝる飛躍發展を成し得たのは、彼の性格に負ふところが多いと考へられる。これに就いて嘗て書いたこともあるが、西鶴が記憶力の達者で、從つて非常に豐富な知識の所有者であつたことは、彼の一晝夜の間に二萬三千五百句の連句を作つて、時人を驚かした事にも知られ、又彼の俳諧や浮世草子が頗る語彙に豐富であることにも知られ、又彼の浮世草子が諸國物語の性質を有して、實際に世に在つた巷談や傳說に就いて、甚だ多く知つてゐたことでも知られる。それと共に又彼が聯想作用に於て非凡であつたことは、その矢數俳諧の非凡な能力の上にも、又彼の浮世草紙の組織の上にも知られるのである。この二つの非凡な力が彼の浮世草子の特殊性を生み出したものである。

然るに、普通作家に必要なる想像作用、又は特殊なる作家の特徴である空想作用の方には、甚だ短なる所があつたと思はれる。これについての面白い例は、好色一代男にある。代之介の三十歲の條である。當時勘當流浪中の代之介

は、最上の寒河江に知人を頼つて行つた。十九年不通の人であつたが、舊好を忘れず歡待してくれた。併しこれも貧乏であるから、その夜主人は狩獵に出掛けて、留守を代之介に托した。代之介が獨り寢てゐると、嘗て馴染んで捨てた四人の女の靈が現れて、彼に怨みをいひ、災をなさうとしたので、驚いて次々にこれらを討ち取ることが書いてある。頗る空想的な事件、空想的な場面である。この四人の靈に就いて、作者の記述を見ると、第一女については

二階より、はしの子をつたひて、頭は女、あし鳥の如し、胴體は魚にまぎれず、浪の磯による聲のして、世之介樣我を忘れ給ふか、石垣町の鯉屋の小まんが執心、思ひしらせんといふ、

とある。かゝる空想は女の鯉屋の名に因んだ聯想で、胴體を魚とし、聲を浪の磯による聲の如しとしたのである。第二の女に就いては、

うしろの方より、女口ばしをならし、我は木挽町の吉介が嬶(ひかめ)おはつが心魂(こゝろだま)也。ふたりが中は、比翼といふて、おもひ死をさした。其うらみにと、飛び懸るを云々、

とある。これも「二人が中は比翼」と誓つて置いて捨てたといふのからの聯想で、鳥の形をした女を思ひ浮べ、嘴を鳴らすとしたのである。第三の女は

庭の片すみより、長二丈斗の女、手足楓のやうに見えしが、風ふき懸る聲して、我は是、高雄の紅葉見に、そゝのかされて、一期の男に毒を飼て、そなたに思ひ替しに、見捨たまひぬ。次郎吉が口鼻(かゝ)、見しつたかとかみつく、

とある。この女の「手足楓のやう」であつたり、聲の「風吹きかゝる」やうであつたりするのも、皆この女と代之介との關係が高雄の紅葉見に起つたからの聯想である。第四の女は

空より十四五間も續きし大綱のさきに、女の首ありて、逆に舞さがり、我こそ上の屋敷あたりに、身をこゝろもになし、後の世を大事

とおこなひすましてあるを、二たび髪をのばさせ、ほどなく迷はし給ふ事、執著そこをさらせじとはひまとひて、息をとめ、嘘びに喰つく、

とある。これも亦比丘尼を誘惑して、戀に落して置いて、やがて捨てた女であるから、仙人の墮落に聯想して、天から大綱で下つて來たとしたのである。十四五間の大綱は人を笑はせるが、要するに聯想の種を明して見れば座のさめる想像畫である。これを見れば、場面は極めて空想的であるが、かゝる場面を取扱ふに當つて、彼はその空想作用の貧弱さをその豐富な聯想作用を以て誤魔化してゐるといふ外はない。さうして彼は作家としては寫實に向ふ外はなかつた人と思はれる。

彼はかく現實的、實際的な人で、空想的でなく、又奔放自在な想像力を持つてゐなかつたので、その方からも彼は寫實によつて立つこととなつたと思はれる。されば彼の新しい寫實は、外評判記の影響と共に、內彼の天分の特殊性がこれを生み出したと見ることが妥當と考へられる。

2　近松が寫實の特徵

淨瑠璃評註難波土産の傳ふる近松の藝術觀は、藝術は虛と實との皮膜の間に存するといふのであり、その寫實觀は、如何に寫實が必要だといつても、有るがまゝに少しも變へず寫すのは、必ずしもよいことでない。實際を幾らか變へて寫す所に藝術の慰みといふものがある。この慰が藝術の目的である。故に虛實の間に存するといふ。かういふ意味である。當時坂田藤十郎の寫實劇の流行があり、歌舞伎と淨瑠璃の兩方に關係してゐた彼としては、寫實といふこと

に、自然一個の見解を持たせられたものであらう。そこでこの見解を尺度にして、試みに彼の淨瑠璃詞章を量つて見ると、時代物と町人物ではその寫實の見方が可なりに開きを持つてゐるやうである。時代物の描寫を虚實皮膜の中を行く描寫と見、世話物の描寫も同様に虚實の間に立つものと見れば、時代物の空想的なものと、世話物の一般にいふ寫實的なものとを、同一の範疇に入れて見なければならないのである。この點に近松の見解も實際上からすれば、可なり漠然たるものであつたと見る外はない。余は今こゝに寫實の展開を見ようとしてゐる立場から、その一段進んでゐる世話物に就いていひたい。

さて彼の世話物は二十四曲あるが、これを總括して、その内容は義理と人情であるといへる。さうしてその點では時代物と多く異ならないが、併しその主とするところは反對になつてをり、時代物の義理を主とするのに對して、世話物は人情を主としてゐる。それでこれを寫實の方からいへば、彼の寫實は人情を中心としてなされたものであるといへる。なほ詳しくいへば、人情の美點を中心としてなされたものといへる。

その所謂人情といふのは、人類共通の感情や本能であつて、様々な現れをなす。喜怒哀樂の如きも人情であれば、親子、夫婦の間の愛も人情であり、人間同士の間の怨み、悪み、妬み等も人情である。近松はこれらの様々な人情を取扱つてゐるが、その中で主なるものを擧ぐれば、男女間の戀愛と、親子間の愛、殊に親の愛と、夫婦間の愛、殊に妻の夫に對する愛の三つである。この三つの愛の相を立派に寫出してゐるところに、主として彼の藝術の價値があるといひたい。恐らくこれだけの人情描寫の技能は古今に獨歩するに足るものである。

いづれの曲を見ても、男女間の戀愛は、彼の作品の世界に於ては、頗る熱烈であり、又盲目的、突進的なものであ

る。複雜なる人生に於ては、男女の戀愛生活は常に圓滿であるとはいひ難い。否戀愛が盲目的性質を一般に持つだけ、それには故障が生じ易い。その故障となるべき社會、家庭の種々なる事情の中に、義理といふものがある。單に彼等の戀愛に對して或人の不贊成があるといふ位に止ればまだよいが、それ等の反對の背後には、世の義理といふものの存することが多い。この義理は生活の社會規範であるから頗る有力である。有力であるだけ、彼等の戀愛生活に壓迫となる。この壓迫力をも突破して進まうとするところに、色々な悲劇も起り易い。所謂近松の世話物の多くはかゝる戀愛悲劇を取扱つたものである。この悲劇にまで突進した戀愛生活を多く取扱つてゐるから、近松の世話物に於ける戀愛は盲目的、突進的、熱狂的であることをその特徴とするのである。親を棄て、家を捨て、主人を棄てても、一口にいへば義理を捨てても、その戀愛生活の持續、成功に進まうとするやうなものばかりである。これは元祿の時代精神と密接なる關係を持つと解される。

次に親の愛、これは父性愛も母性愛もある。父性愛は「冥途の飛脚」の孫右衞門、「生玉心中」の五兵衞、「博多小女郎浪枕」の小町屋惣左衞門、「心中宵庚申」のお千代の父等によく寫されてゐるが、母性愛は「女殺油地獄」のおさわ、「丹波與作」の重の井等に寫されてゐる。世に親の子に對する愛ほど、深く又純なるものはないといはれる。近松はこの人情の純眞さ、深さ、強さを遺憾なく描寫してゐる。而してそこに僞りなく誤魔化しなく、いゝ加減なく、よくこれを寫實してゐる。匹夫匹婦と稱せらるべき無學無知なるものの上に、この尊い、美しい人情を描寫してゐる例は、「冥途の飛脚」の孫右衞門を始めとして、彼の描いた父や母の上に一々指摘することが出來る。而してかゝる點は千古を貫いて不滅の文學として永遠に遺るであらう。

次は夫婦愛殊に妻の夫に對する愛であるが、これは天網島の治兵衛の妻おさん、重井筒の德兵衛の妻おたつ、その他の上に描かれてゐる。夫婦愛は戀愛と似て、それと全く同じものではない。同じ異性間の愛には相違ないが、戀愛に比ぶれば、人格的なものであるだけ、一層根強い所がある。戀愛は必ずしも、對者の人格を理解した上に起るものでない。一寸したところから起る。異性の中に自分を見出しさへすれば起り得るものであるが、併しやゝもすれば、結婚から相當の日子を經過して、漸く相方の本地がわかり、その性格がわかつて來る頃になつて冷めることがある。所謂夫婦の倦怠期なるものが來るのであるが、眞の夫婦愛はそこらから次第に創造されて行く。さうしてそれには人格の理解が第一であるのである。その理解と共に互にその尊重すべきところ、愛すべきところを見出せば、彌以てその愛は深くなる。假令互に色々な缺點を見出しても、戀愛の樣に冷めないのは、この人格の理解、尊重があるからである。天網島のおさんにしても、重井筒のおたつにしても、夫は他に愛人を得て、夫婦愛を裏切つた、薄情な、不倫な行爲を敢へてしてゐるのであるから、甚だ不都合な、擯斥すべきものであるが、彼の女等はなほ多くの犧牲をも忍び、渾身の愛を捧げて、その夫に盡くしてゐる。さうしてそれは決して義理ではない。義理を含むにしても、寧ろ愛が主であることは爭へない。近松はこの夫婦愛をも亦見事に描寫してゐる。これも決していゝ加減の想像や空想で描ち上げたのではなく、實際に就いて描寫したものである。この點にも彼の寫實の秀拔さを十分に見せてゐる。

以上、三種の愛の描寫を近松の描寫の代表として見れば、近松は實に秀でた人情の寫實家である。彼が人情詩人といはれ、愛の作家といはれるのは、この僞りなき人情の寫實に秀でてゐる爲であつたといつても、多く誇言ではあるまい。さう思はれるほど、實に優秀なる技能を見せてゐる。

そこで、今西鶴と比較して見ると、物語小說などの先行文學の寫實に對して、等しく新しい主題、新しい手法を示したものではあるが、二人には各その特徴があり、而してその特徴に於ては古今に絶した優秀なる技倆を示してゐる。先づ西鶴のことは、先にいへるが如く、人間の本能、人間性について、新なる眼を開いて、在來の美の標準に拘らず、これを寫實してゐる。そこに新文學の光彩が頗る鮮かに見えてゐる。然るに近松はさういふ方面では寧ろ古いが、古いながらも在來の寫實の對象であつた人情殊に三種の愛を、新しく見直して、自分等自身、又はその周圍の實際の生活の中について寫實してゐる。それで主題は西鶴ほど新しくないけれども、その寫實は全く清新さを以て我々の前に現れて來るのである。

なほその手法を見れば、西鶴は描寫の細目の數を少くし、その筆致を簡にして、鋭く人性の祕密に迫つてゐる。又個性の特徴を寫してゐるが、近松はさう簡單には寫さない。相當委曲を盡くすやうな精細さを持つ場面を構成して寫してゐる。深さに於ては西鶴に讓るとは思はれないが、個人を見る眼に於ては西鶴ほど鋭くない。いはば普遍的なる人情を見て、人々の個性を見ないところがある。それで孫右衞門も五兵衞も、惣左衞門も同一の親父型であり、德兵衞も、治兵衞も、忠兵衞も、同一の若者型であり、おさんもおたつも同一の女房型となつてしまつてゐる。かういふやうに二人の寫實は違つてゐる。

以上は、元祿時代に於ける寫實の一展開を、浮世草子、淨瑠璃の兩方に見たのであるが、實はその兩方面に於ける、この展開を開いた代表者として西鶴と近松の寫實について見たに過ぎない。爾來浮世草子に於ては、西鶴のこの寫實を紹述したものが相次いだが、八文字屋本などは、一方には空想、想像で捏ち上げる風を生じて、寫實としてはその

純粋を失つて行つた。淨瑠璃方面に於ても、似てはゐるが、時代物は時代物として、空想的な流風を追ひ、世話物は近松の開いた寫實を守つて行つた。さうしてそれが相混じた所に、時代世話物も生じた。この風潮は大體歌舞伎の方面も一致してゐる。さうして更に次の一展開に及ぶのであつた。

五　江戸文學の寫實（洒落本、滑稽本、人情本）

江戸時代中期から後期にかけて、ストリーを持つ文學は寫實を主流としながら、又一方には空想的、理想的なる流れが存在する。さうして、寫實そのものに就いて見れば、元祿期の一展開から、更にこの期に別の一展開をなしてゐる。

さて洒落本はその内容は通と滑稽であり、その描寫の對象は花柳界の生活であり、その文體は會話を主とし、その會話は口語體である。以上をその主なる特徴とする。而して同時にその描寫の態度は寫實的なるものである。さてその主なる内容たる通であるが、この通といふ語は「通曉」、「通達」の通で、通じ知るの義である。江戸生活に通ずることをいつてゐる。當時の江戸の都市生活は、一種の享樂生活であつた。情趣、趣味に遊ぶの生活であつた。故に通といふことは、その江戸趣味を中心とした江戸生活を指すのであつて、衣、食、住の上に現れた江戸趣味、芝居、廓、社交等のあらゆる生活の上に現れた江戸趣味を理解し、味解し、それをその身に體し、實行するを極致とするものであつた。通は知を窮極とするものでなく、それを入口としたものである。知を通らなければ斷じて通人たることを得

なかつたものである。それであるから、通は先づ外形を知解することから入つて、遂にその精神の會得に及ぶのであつた。さうしてその外形に留まるやうなものは、未だ至らざるもので、所謂半可通の類であつた。この生活の外形に現れた通は頗る多端で煩雜なものである。頭髪は本田髷の、しかも大きくないもの、刷毛先がどうの、髪がどうの、元結は何でなければならぬ、油はどうつけねばならぬ。月代の剃り方はどうといふやうに、一々その部分々々について、世の流行の如く決つて行つたのであるから、これを風俗の全部に亙つて、よく通曉するといふことの容易でないことは言ふまでもない。であるから、地方人は無論のこと、所謂半可通なる市人も非常に多く、洒落本の作者のやうな通人達の世界からは笑ひものにされてゐた。これが洒落本中の滑稽ともなつてゐる。それほどに、唯外面的な通を知ることは困難であつた。洒落本中の「十八大通百手枕」や、「舌講油通汚」の如きは、全般的なる江戸の通の說明を主としたものであるが、洒落本は全般的なる通をも含んではゐるが、花柳界を中心とし、遊びを中心として、江戸の通を表したものである。かく知るを第一歩とし、或はその大部とした通を內容としたものであるから、洒落本の寫實は外面生活の寫實、しかも通の知解に足るだけの纖細なる寫實をその特徵とする。人物は通人とか、半可通とか、野暮とか、さういふやうな類型に止り、性格がないから、生きた人物を見ることは出來ない。さうして近松の世話物に於ける人情の描寫もない。常に男女の關係が取扱はれ、これを會話に依つて寫してゐるが、眞の戀愛は極めて稀にしかない。通や、半可通や、野暮や、未通（うぶ）なる男性と、怜悧で、知あり才ある遊女や、愚で、才なき遊女などの間の、客對遊女の一種の關係を取扱つてゐる。それで戀愛の如き眞情の交換ではなくして、互の腹の探り合ひ、隱し合ひ、さうして手管に掛け合はうとしてゐる、その間の掛け引きである。惡くいへば、虛言（うそ）と僞（いつは）りの交換といふべきもので

ある。尤も後の人情本化したものには、戀愛らしい人情も見えてゐるが。

かやうに、通を表さうといふ目的の爲に、纖細なる寫實を必要とするので、風俗の描寫も、會話の描寫も、最も在るがまゝを細かく精しく寫さうとしてゐる。會話は會話そのものに通があるのであるから、發音までもそのまゝに寫し取らうとしてゐる。

かゝる洒落本の寫實の特徴は、文體の上に著しい展開を來さしめた。會話に純口語體を用ひたのは、近松以來の淨瑠璃世話物にあつて、なほ他にも多少あつたが、洒落本の口語體はその尤も極端なる寫實である。それで往々作者自ら註釋を施す必要を感じてゐるほど樂屋落ち的特徴を持つてゐる。京傳の通言總籬の一節に、

そのまんま二かいの目あたりへつれて行つてほさせや。オヤ志庵さんよくお出でなんしたね。えんさんかえ。此の間はお早々でござりやした。うちでござりやすわ。（ト仕かけたしごとをかたよせる。）えんこゝのうちのながしは松ばやの湯殿といふもんだの。しあん本町の棚したもありやす。（喜之介は申じきりのはしらによりかゝつて、きみせんをしのびごまでひいてゐる。なりはつむぎじまの そで口のちときた、うらえりの小そで、もえぎさなだの下タじめを帶にしてゐる。三味線を下に置き）えんでえぶねむさうな顏の。しあん客を逃したしんざうといふ顏だぜ、丁字屋だと帳場で叱られたといふ顏だ。（喜之介ゆうべは常さんの茶ばなんで、升屋へめるりやした。けさ八つにけへりやして、今起きやした。）えんつまさんはやつぱり深川のせかいかの。しあんおみなもがうてきな奴だよ。このごろもどこかの番頭にかゝへを仕て、もらつたさうだ。（深川にて、かゝへをしてもらふは、吉原でしんぞうを出すに、ひとしきことなり）

この引用文は、艷次郎が志庵と共に、喜之介の家を訪うた所である。彼等の社會の通がこの會話の上に表されてゐる。さうして會話の內容は彼等の日常のこと以外には出てゐない。事件らしい事件もなく、又これらの會話の中に思想が盛られてゐるでもなく、又感情といふものすらよく表れてゐるとはいひ難い。これだけ引いて見ても、或る特殊な人達の日常生活の斷片を見るだけである。藝術的とか、詩的とかいふべき何物をも見出さないのである。さうして

洒落本の會話の文體の特徴は寧ろかういふ點に在るといひ得る。一體會話が標準語を離れて、訛音、方言的なものまで取り入れたのは、唯それらに關する知識を與へるといふことを目的とするものではない。（文學に在つては）。彼の田舍の特殊なる言葉を用ふるが如きは、その地方的なる特色、例へば質素、素樸とか、無知とかいふ地方の人の特徴を示したり、又さういふ地方語の中に宿つてゐる地方情調といふが如きものを表さう爲である。一口にいへば、地方色（ローカル、カラー）を出すに必要であるからである。然るに洒落本の方言的、訛音的特徴をその儘に寫した寫實は、洒落本が通を目的とした文學であるから、それ自身の知的理解を旨として、地方色を出すを旨としたものではない。つまり作者はその通を衒つて、人間を描き、人生を描く文學の必要以外の纖細な寫實をこの方面になしてゐるのである。註釋の必要はこの無用な方面に出てゐる爲に必要であると見られるものがある。かゝる註釋の類で、語彙を時々見る。例へば、深川を書いた「辰巳の園」の終に

通言

○ばからしい、○うそはねェ、○ほんにか、○けしからねェ、○どふしやうのふ、○よしか、

などを擧げて、なほ、

上總木綿（ぜうのなき客をいふ）　ひやうたくれ（あしき客をいふ）

とんちき（右同斷）　ゆふでく（田舍ものをいふ）

木所の穴藏（しつぷかをいふ）　ちやら（うそをつく人になぞらへていふ）

などの隱語風なものを並べ、カ行の挾み詞を擧げなどしてゐるのも、同樣に知るを旨とするからである。

なほ「傾城觸」（京傳作）の終には、新吉原の遊女屋の言葉の特徴として、「ござります」の意を、松葉屋では「おす」、丁字屋では「ざんす」、扇屋では「だんす」といふなどと示してゐるのも同様である。

この洒落本は、滑稽本と人情本とに展開した。今滑稽本の寫實を見よう。滑稽本の對象、內容は何であるかといふと、內容はその名の如く滑稽を主としてゐるが、その滑稽は、江戸の通の對照であつた野暮や、又は半可通を揶揄し、愚弄することに由つて生ずる滑稽であるから、自然野暮に屬する各種人物の現はれてゐることが多い。

洒落本から展開したものであるから、滑稽本も大體洒落本と傾向、特徴等を共通に持つてゐる。卽ち洒落本の內容の一つなる滑稽を內容とし、その滑稽をば、江戸の通、江戸の趣味を標準として、これに反するもの、これに似て非なるものを愚弄したものである點を、その儘に引いてゐる。さうして洒落本は特にこれを花柳界に就いて寫してゐるのに、滑稽本はこれを一般社會について寫してゐる。兩者の間の極めて接近してゐることを見るには、彼の田舍遊里、田舍客、田舍遊女の風習や言葉等を寫した洒落本の變通輕井茶話道中粹語錄を取つて、旅行記體の滑稽本道中膝栗毛中の田舍遊里、田舍客、田舍遊女等を寫した條に比照して見ると、その間に何の間隔の存しないことを知ることが出來る。又部屋を分ち、人物を、通、野暮、半可通、實のある遊女、薄情女などに分つて寫したものを見ると、三馬の小形滑稽本の氣質の寄ちを書いたものと同一に見られる。又それ〴〵の階級、その他の種類によつて、人物や風俗を分けて寫した點も兩者相同じであることを見る。又言葉について纖細に寫し、それによつて階級等に於ける特徴を寫し分けようとしてゐる點も亦同樣であるといへる。これ等の點についても、滑稽本は單に洒落本の題材を變へ、內容を少々かへたに過ぎないものたることがわかる。從つてその寫實に於ても別段の相違がなく、その間に展開のいふに足

るものもないのである。唯これだけのことはいはれる。洒落本は飽くまでも、通を表さうとしたものであるから、飽くまでも寫實に忠實であり、それだけに知解から來る興味に過ぎて、情に訴ふるものの足りない嫌ひがあるのに對して、滑稽本はその通を離れて、滑稽の興味を主とするに至つた爲に、寫實の忠實さをやゝ失つて、遊戲的に誇張し、空想的に興ずる傾向を生じたことである。人物に就いて見ても、洒落本中の人物は、實際の人物を離れてゐないが、滑稽本中の人物は實際にはない、傾向、性癖を誇張した人物がある。膝栗毛の彌次、喜太にしても、八笑人、和合人、七偏人の人々にしても、又尤も寫實に忠實性を持つてゐる三馬の浮世風呂や、浮世床中の人物にしても、中にはさうした人物を含んでゐる。

滑稽本は笑の文學として大體右に述べたやうなものであるが、滑稽を表す方法として、隱れた醜を表に暴露し、物を裏から見ようとしてゐる。この傾向の轉換は式亭三馬の上に見るのが尤も明かである。彼は有名な浮世風呂や浮世床には、寫實（或は寫生ともいふべきか）を主としてゐる。浮世風呂は初篇だけは、一九の膝栗毛を摸倣するところが多く、滑稽的な事件、滑稽的な場面の構成、滑稽的な人物を用ひなどしてゐるが、二篇以下には、ありふれた事件、人物、會話の上に自然に滑稽を湧かしめてゐる。こゝに見出されるものは、比較的に純な寫實である。それはよし皮相、外觀に止つてゐるとはいへ、可なりに忠實な寫實であるといへる。

然るに、三馬の短篇ものを見ると、この忠實な寫實を、所謂穿ち、皮相といはれる方に轉じてゐる。常に裏から覗いて、人生の醜、人間の弱點、短所を見出さう〳〵としてゐる。そこに諷刺も見出されぬことはない。これを作品の上でいへば、古今百馬鹿、四十八癖、早替胸機關、人心覗機關、人間萬事虛誕計、酩酊氣質、七癖上戶、一盃綺言等

である。いづれもその書名の上に、穿、皮相を表してゐるのである。

古今百馬鹿は、その名からすれば、なほ長いものになるべきであつたか知らぬが、實際は僅か四人の馬鹿者を描寫してゐる。女房に鼻毛をよまれてゐる男、勝負事に負けて無暗に腹を立てる男、客を叱る身の程知らぬ書間、大食を自慢にする男、これである。女房に鼻毛よまるゝ男の一話を見ると、女房に惚い、即ち女房への強い愛著を持つてゐる、弱い、愚かな亭主と、この亭主の弱點（夫婦關係に於ける弱點）を押へて、亭主を翻弄操縱してゐる賢い、下町式の女房とは、その寫實の筆の上によく現れてゐる。この女房の亭主操縱は遊女式の手管であるが、そこに自由に亭主を動かしてゐる。固より一家庭内に於ける短い時間内の寫生といふ風に出來てゐるが、それでもよくこの間に、二人の氣質、性格、風采を寫し出してゐる。それには唯外觀を正面からばかり寫すでなく、常に女房に惚れた弱點と、美貌を自慢にする弱點とを、亭主の上に皮肉的に見て寫してゐるのである。又女房には、遊女式の知惠と手管とを持つた女の一重内の心理を穿つの用意を持つて、寫實してゐるのである。

四十八癖も亦古今百馬鹿と同樣の作品で、女房を怖はがる亭主の癖などと、癖として各種の氣質性癖の特徴を寫してゐる。女房を怖はがる亭主の癖の一話は、この長屋式の下等な江戸人夫婦を、皮肉に穿つて寫したもので、男女ともにその性癖、傾向の一斑を示してゐる。早替胸機關は、やはり、各種の型の人物を選んで、その心を表裏、内外から寫したものである。例へば「新婦變爲姑婆」と題した章で見れば、前條には、嫁が髪結を相手にして、髪を結はせながら、姑、小姑の多癖なこと、讒訴することなどを數へて、嫁の立場の苦しいことを語り、その終に「お前やわたしが年よつて、嫁を取つたらあゝじやねえ隨分可愛がつてやるのさ」といつてゐる。さうして次きの條は、後年この

嫁が姑になつて、下女を相手にして嫁の悪口を盛にいつてゐる。髪結に長い時間を取る不平、化粧に念の入る不満、仕事の後るゝ不平などを並べてゐる。すべてかやうに、人の立場々々に由つて變る人の心の不一致を皮肉に穿つて寫實したものである。

人心覗機關は、前述のものと同じ趣向で、表に馬鹿を盡くさぬといふ男が、女房を欺して放蕩をすることを、兩面から寫してゐる。患者の家では物知り顏に、病氣や本草に就いて講釋をする醫者が、家に於ては碌に書も讀めず、實は幇間で繁昌をしてゐることを、やはり內外兩面から寫してある。この類五種の話を含んでゐる。

人間萬事虛誕許は、愛相の好き虛、空辭儀の虛、風雅を好む虛、昔自慢の虛、老婆の虛、女を嫌ふ壯夫の虛の六條を設けて、人間の虛實兩面を獨白風に寫してある。その主としてゐるのは虛の方で、實の方では虛の虛たることを暴露させてある。一例を擧げると、愛相の好いといはれる女の虛を書いた條は、この女房が或來客に對した所で、日頃は御噂ばかりしてゐました」とか、「よくお若くて、少しもおかはりがない」とか、「時分だから御飯を召上れ」とか、愛相をいひ、客がそれらを辭退して歸りかけると、「さらば提灯を上げませう」といひながら、ぐづ〳〵してゐる內に、客は歸つてしまふ。これを寫した後に「まこと」と題して、

けふは思ひもつかねえ人が來て、おらア何處の人かと思つたが、挨拶する內にやうやう思ひ出した。丹六さんはがうぎに年がよつたぞ、くしや〳〵として白髪だらけの大ぢぢいになつた。コレ三や明朝の朝はお茶漬でいいよ、あの人に食はれると一人前足りなくなる所だつけ。その蠟燭も提灯もしまつて置きや、あの人に貸してやるとめつたにかへす事ぢやねえ、先づあー言つたものさ。

といはせてある。挨拶應對の對人の際に現はす人の虛僞を主として、後これを暴露して虛僞たることを示したところ

に著眼がある。

酩酊氣質、七癖上戸、一盃綺言、いづれも酒客が酔中に現はす癖の色々を寫したもので、獨白體と對話體と兩樣を用ひてある。これは正面から、酩酊者自身の暴露した弱點短所を寫實的に寫したものである。

かやうに、滑稽本が滑稽可笑を表す方便として、皮肉、穿ちを取るやうになつたので、寫實も、人の醜なる點、弱點、短所を狙ふやうになつてゐる。これが又自然に、洒落本から滑稽本へと、外面的、皮相的に寫實した風を自然にかへて、心理に突つ込んで寫し、隱微な點まで深く入り込んで寫すといふ風を生じたのである。

次に人情本に移る。人情本も洒落本から出たといつたが、その起原は、梅暮里谷峨の「傾城買二筋道」と題する洒落本あたりに在る。本書は寛政十年に初篇を出し、翌年に二篇の「廓の癖」と三篇の「宵の程」が出て完結したもので、洒落本には類の無かつた、二篇三篇と續いたものである。この形の點でも人情本の先驅たるものである。さてこの初篇は全然洒落本一般の形式と手法に成つたもので、前話は獨立したものであるが、それで後話もそのまゝで完結としてよい筈であるが、偶後話が後を引くやうになつて、第二篇が出來、遂に三篇に續いたものである。これを少しく詳しくいふと、初篇後話は、始め嫌つた客が眞情を傾けて長く通つて來るので、遊女が遂に動かされて眞の愛を持つやうになつたといふのである。これで終としても、前話が大口說の末馴染の客の緣切になる話で、虛實の對照として滿足な洒落本の形をなすのであるが、作者はこの後篇の話の筋を引いて、男はこの戀の爲に勘當となり、次第に周圍に不義理が重なつて、妓との逢瀨も絶えた。それから男（文里といふ）が妻の貞實、妓（一重といふ）が主人の任俠、一重の大病にて鄕里に歸ること、その妹が姉の身替りとなつて妓となること、文里の憂鬱、勘當を許されて歸り、

一軒を家に引取ること、かういふ人情本式の事件の連續が筋となつたものである。彼の有名な人情本小三金五郎の娘節用なども大體似たものである。

更に享和二年の一九の酒落本「鄙の意氣地」に至つては、一層人情本との接近がある。その筋を語れば、直にこの事は了解される。さる片山里に夫に別れて寓居してゐる一婦人がある。手習の指南をしてゐる。二人の娘があつて、姉おいそは父の大病の際に吉原に身を賣つて、花園といふ妓となつてゐる。妹おなみは家に在る。父死し、母も亦大病になつて、糊口に窮するに至つた。こゝに江戸富家の息子伊三郎といふもの勘當されて、この地に來てゐたが、おなみを愛して彼等母子を憐んだ。かくて二人は懇仲になつた。母死んで後、おなみは伊三郎が勘當を許されて江戸に歸る時、伴はれてその家の妻となつた。その後伊三郎は吉原に遊んで花園と憎からぬ仲となり、家を明けるやうになつた。母もおなみも共に心配して、おなみは遂に書を姉に贈つて、伊三郎の不身持を諫めてくれと賴んだ。花園は義理故に愛想づかしをする。伊三郎怒つて他の妓に見かへようとしたので、花園は事實を告げた。そこで伊三郎は表面花園と切れて時々逢ふといふ約束をした。その夜二人の夢に、おなみに恨まれたと見た。かういふやうな、純人情本式なる說話によつて、酒落本式の寫實を酒落本式の文體で試みたものである。姉妹に通ずる亂倫は人情本の世界では許されてゐることである。

かくの如く、人情本は酒落本から漸次に、又自然に發生されて出來たものであるから、凡ての點に於て酒落本を襲したものであるが、唯內容が通を少くして、滑稽を失つてゐるから、そこに自ら別なる傾向を生じてゐる。即ち人情本は、艷麗、好色を中心として人情を寫實するものとなつてゐる。それで、人物の類型も數を少くし、その風俗上

の纖細なる寫實も又同樣に少くし、言葉の特徴に極端なる細かさを寫し出さうとしたところも少くなつてゐる。そこに洒落本との相違があり、又滑稽本との相違もあるのである。

かくて人情本の寫實は只管に、男女の痴態、柔媚、纖艶なる情話、三角關係等から起る生温いいきさつ、さうしたものに向つてゐる。元祿の奔放な精神、熱烈な感情は、戀愛から起る葛藤を悲劇に終らしめてゐるが、人情本の世界は頽廢の世界であつて、爛れた感覺に生き、濃厚なる情痴に生きた男女の間には、戀愛好色からの葛藤も、徒に歩み寄りに終るを常とする。場所といへば、富家の別莊とか、吉原妓樓の奧とか、お茶屋とか、遊藝師匠の家とか、妾宅とか、遊船とか、さうした艶かしい、享樂の場所に相應しいところであり、人物は、社會の苦い風霜を知らないやうな、富家の息子、藝者、娼妓、花魁、女遊藝人、妾といふやうな、女にしては色を賣る女か、生活の苦を知らず、唯戀に生きようとするやうな娘、男は概して生な息子から色男型の人物が最も多い。會話は繊々たる痴話で、戀と色との世界、それを出でても遠くは行かない、享樂の世界である。さうしてかゝる感覺や情緒を助けるものに、飲酒の宴があり、淸元、常磐津などの音樂があり、かうして、唯戀と色を中心とした享樂の甘さに、人を陶醉しようとするものである。

さうして時代はといふと、享樂の果ての頽廢時代で、英氣は去り、生活の眞劍味は失はれて、唯その日〳〵を面白く、陶醉化して行かうとしてゐる。感覺を中心としたあらゆる享樂の道を仕盡して來てゐるので、最早さうしたものに對する神經は麻痺して、大抵のことには驚かない。そこで享樂的な神經の刺戟を猶此上にも強める必要に迫られてゐた時代である。さうして人情本の內容は極めて低調なものであつたから、感覺的、情緒的の刺戟を強める爲には、

趣向の筋と、描寫とを複雜にし、精細纖巧にして、その寫實の效果を强むる外はなかつたであらう。同一の事件の形をかへて、繰返し〳〵してゐる。しつこく情話を語らせてゐる。唯猥褻の極みの場面だけを避けてゐるのは、時代が一方には儒教的精神によつて、功利的になつて、頽廢時代の外面を道德的に粉飾してゐた爲である。それで露骨なる描寫は避けてゐるが、それを思はせぶりにして、效果は露骨なる描寫以上に、挑發的になつてゐる。若し夫れ當局の取締の目をかすめて出版された、所謂春本を見ると、性慾遊戲の露骨なる寫實を、徒に繰返してゐて、醜惡を極めて、却て厭惡と、倦怠とを感ぜしめるものとなつてゐる。

さうして所謂人情の戀愛、好色、性慾を中心とした描寫は、洒落本の遺風を承けて、外面的、皮相的、淺薄なものであつて、同じやうな人情を寫しても、近松の世話物の如き深さ、清さなく、よく人情の么微を穿つと評せられるやうな鋭さはないのである。好色や性慾を寫しても、西鶴のやうな人性に徹して、よく人間といふものを知らしめ、考へしめるやうな所もない。それであるから西鶴のやうな暗示に富んでゐるものではない。

又これを洒落本に比すれば、通の詳しい描寫に於ても、又廓に於ける男女の間の心理の穿ちに於ても及び難い。又滑稽本のやうな多數の氣質、類性の描寫をなしてゐるでもないので、文學としての價値は隨分疑はれるほど、その寫實にも特殊なる發展もないのである。

六　空想的又理想的文學と寫實性

1　淨瑠璃時代物と寫實性

以上は、江戸時代文學中の寫實的なるものに於ける寫實性の展開を見て來たのであるが、こゝには、空想的又理想的なる文學中の寫實性について少しく述べておきたい。

先づ夢幻劇などといはれた、空想的要素を多く含んだ淨瑠璃時代物について見よう。淨瑠璃の時代物は、近松以前の所謂金平淨瑠璃はいふに及ばず、近松物でも隨分奇々怪々なことが書かれてある。神佛が形を顯されたり、怪物、幽靈が出たり、魔術が行はれたり、動物が人間の如く物を言つたり、女性が大蛇になつて釣鐘の中に入つたり、この種の奇怪事が隨分澤山ある。

さて淨瑠璃といふものは、綜合藝術の一種で、文學的な詞章を、音樂的なる曲節にかけて、これを語り謠ひ、又これを舞踊的、劇的な操(あやつ)りにかけて玄關に演出するものである。從つて文學的な詞章といへども、純粹なる讀物として綴られたものでなく、曲節を豫想し、操りを豫想して綴られたものであろ。それで淨瑠璃詞章について空想性、寫實性を考ふるにも、作者が曲節と操りとを顧慮して作つたものであることを、考慮に入れて考へねばならぬ。

そこで淨瑠璃が時代物を主とし、又その時代物が空想的、理想的なものであつたことも、曲節又は操りとの關係の上から考へるとさうあるべき、又さうあつたことが自然であつたと思ふ。近松頃の操りも、曲節も、その後には傳は

つてゐないが、今日の操りなり曲節なりを土臺にして推定し、想像することは無理でなく不當でないと思ふから、今日の義太夫節淨瑠璃を土臺にして、義太夫節發生期の淨瑠璃操りを大體考へて見よう。曲節の方は餘り、その寫實性に關係を持たぬと思ふから略するが、操りについて見れば、操りに用ゐられる人形は、決して實際の人間と同一なものではない、生命を持たないことは言ふまでもなく、形は人間と等身ではない。さうして決して今日の呉服屋のショーウィンドーに見るやうな色形などの精巧に出來た顏を持つてゐない。普通の人形でいへば、顏の色は生白い。特殊な人形にしても餘りに赤かつたりして異樣である。この生白い顏色はその儘に見れば何となく物凄い感じを持つものである。さうして眉や目や口の動くものもあるが、動かぬものもある。これが遣ひ方は、始めは裾の方から、遣ひ手が手を突込んで、一人で遣つたのである。後今の樣に三人遣ひに發達したのであるから、一人遣ひ時代は其活動が甚だ不完全なものであつたらう。

かういふものであるから、一般的に見て、生きた俳優の演ずる歌舞伎に比べると、不自然であり色々の不便を持つてゐたことは言ふまでもない。餘程この方が演出上に不利であつたに相違ないのである。

が又考へれば、人形であつても、淨瑠璃の持つ內容、義理人情を寫すことには、立派に成功してゐる。現代文學のもつやうな、細かな心理、性格は寫し得べくもないが、義理人情なり、類型的人物ならば、十分に寫し得てゐることは、現在の操りについて見ればわかることであるから、近松の時代も大體推察されよう。さうして近松以前はそれよりはもつと幼稚なものとして推察する外はなからう。

さて近松、義太夫頃の淨瑠璃操りの鑑賞がどういふやうに一般大衆からなされたであらう。これも推定の外はない

が、この推定は、竹田出雲以前の淨瑠璃が劇的であるよりは敍事的であつたこと、興行毎に斷えず新作して興行し、同一作品の幾度もの興行は極めて稀であつたこと、この二つの事實から出來ようと思ふ。若し當時の觀客、聽衆の鑑賞の中心が、今日の我々の樣に音樂なり、操りなりの技巧にあつたならば、新作は寧ろ不利であつたらう。現に我々は素語り淨瑠璃にしても、又人形操りにしても、よく熟知してゐる作品ほど興味を覺える。さうして決して全曲を通して演出する必要は感じないのである。この事實から、當時の觀客、聽衆の鑑賞の中心は、今日の我々の如く音樂及び操りの技巧にはなかつたと知られる。然らば、その內容かといふに、內容は殆ど千篇一律で、義理と人情の外はないのであるから、この方面も又鑑賞の中心にはなり得なかつたと推定し得る。さうすれば、時代物鑑賞の中心は、曲の筋に在り、その說話にあつたと推定する外はない。今日の映畫を見る人の多くは、その筋、その說話を中心に見てゐるが、それと似たものであつたらう。この筋や、說話を重んずる見方であれば、敍事的なものが適當であり、又どうしても新作が必要である。見古したものから多くの興味は得られない筈である。又同一作を繰返し見ることは欲しない筈である。余はかく二つの事實から、當時の觀客聽衆は、淨瑠璃の筋や說話を中心に鑑賞してゐたと推定する。

次に人形の現し得る世界を考へて見るに、俳優は人間であるから、その舞臺に現し得る世界は人間の世界に限られる。馬や、稀には猿なども用ひられるがいふに足らない。所が人形は人形で、人間でないから、如何に人間を變したものとしても、人間の世界を多少擴張した世界まで現し得る。人間の實際の活動以外にも多少出で得る。神佛の世界、妖怪の世界、それから人間には不自然な動作までも入り得る。

然るに、低級な大衆の興ありとする、筋、說話、事件の珍しく、面白いといふ點からいへば、實際の世界よりも、

非實際の世界、空想を交へた世界に在るのである。これ當時の觀客が、時代物の空想的なる筋、說話を必要とした所以である。これが時代物が寫實は含むが、寫實に徹するほど、これを重んじなかつた所以である。

卽ち時代物が、珍しい、空想的な事件等に依つて、操人形の世界に、珍奇、玄怪、勇壯、剛快、華麗、悲壯、悲慘、さういふ類のものを並べ立てて、見る目の面白さに、觀客を喜ばさうとしたところに、時代物の空想的な性質が生れて、展開したものと考へる。

序にいふ、先に音樂を中心に鑑賞したものではないといつたが、何れの曲にも道行き、物盡しなどの文章としてむつかしく、讀み、又は語るのを聞いてはその意義の解し難いものを含むのは、かゝる部分は、曲節を主として、音樂的鑑賞を旨としたものであり、又そのやうな音樂的な部分を多く集めて、段物集を編んで、音譜をつけて出版したものの、色々あるのを見ても、かゝる部分には特に曲節の音樂を主として鑑賞したことが知られる。併しこれは全曲中の特殊なる部分であつて、一般の部分はそれとは大に趣を異にして、それが全曲の大部分を占めてゐることを知らねばならぬ。

淨瑠璃はその大部分は敍事的なる部分で、そこが、卽ち筋、說話、事件を主とし、舞臺の上では、見た目の種々なる興を主としてゐるのである。これが、時代物が人間、人生の眞實を知るといふ寫實の興味を餘り必要としなかつた所以である。

かういふ事件、說話の興味、人形操りの見た目の興味を、時人は時代物に依つて盛んに味はひ樂しんでゐたが、併しこれは要するに低い興味であつたから、時人も不滿を感じて來た。それを補つたのが、寫實的な世話物であつたの

である。

時代物の人形の興味が空想的な時代物を重んぜしめてゐたことは、人間卽ち俳優の演ずる歌舞伎の方面で、人形操りに先だつて、世話物の行はれてゐた事實もこれを證明してゐると思ふ。俳優は人間であるから、人間といふところに制限をうけて、非人間的なる世界には多く入り得ない。これが人形の非人間的なるものに先だつて寫實的なる世話物を生んだ所以と見ることが出來る。

2 讀本と寫實性

讀本は江戸文學中の最も非寫實的なるものである。その作の態度、目的等から見ると、空想的又理想的であり、目的から見ると、勸善懲惡の敎訓的である。さうして又興味の上では說話そのもの、筋そのものの上に重きを置いたものである。故に讀本中の寫實性は殆どいふに足らないものである。

讀本の代表作者は山東京傳と曲亭馬琴であるが、こゝにはこの二人に就いても、一々詳述することを省略する。さて讀本を概見すると、浪漫的であり、且つ理想的であつて、內容としては、江戸時代の武士精神、寧ろ武士の理想を以てしてゐる。當時は舊來の武士道に儒敎の感化の頗る多くなつた時代であるから、武士の理想とはいつても、それには儒敎的精神が頗る目立つのである。讀本はかゝる精神を內容として、武士の生活、殊に非常時に於ける武士の生活を題材としてゐる。すべて非常事件を假りて武士の精神を表現しようとしてゐる。それであるから、舞臺も一武人の家庭などよりは、一國一域の主なる地位の高い武士を選擇してゐることが多く、事件もかゝる大なる家の存亡に關

する大事件を取扱ふことが多く、又お家騒動や敵討の如き非常事件を取り、人物はすべて水平以上の人物を取つてゐる。さうしてなほ、荒唐不稽なる空想的要素を多分に含んでゐる。馬琴の如きは支那の稗史、演義の類から材を多く得てゐるので、彼の作には支那の稗史、演義風の空想的な事件、筋が多い。かやうであるから、讀本に於ては、寫實性は問題にならないといふのである。

讀本の中には、題材から見て巷談街說物といふべきものがある。市井に於ける卑近な實際の事件をば、假令間接的ではあつても、その題材としてゐるが、これらにしても、事實を有りのまゝに忠實に寫したものでなく、寧ろこの卑近なる事實の相を借りて、又これを故意に大いに變化して、理想を盛り、空想化して、所謂讀本化したものである。であるから、これを寫實の立場から見れば、當時の世相を矯めて事實に遠ざかつてゐるばかりでなく、人間性を歪めて、不自然なものにしてゐる。曲亭馬琴が「松染情史秋の七草」の如き、その題材を溯れば、これより先き大阪に起つた市井の一小事件である。卽ち油屋の娘でお染といふ二歳の少女を、丁稚久松が守りをしながら過つて川に落し、終に溺死させた。娘の親が怒つて久松を土藏中に拘禁して置いたところ、久松はやがて土藏中に縊死した事件といひ、一說には淨瑠璃に綴られてゐるやうに、情死事件であつたともいふが、とにかく市井の一小事件であつたに相違ない。

この小事件が、當時の作者の題材となつて、先づ紀海音の「心中枩の白しぼり」となりて、義理に詰つての、若い男女の情死といふことになつてゐる。さうしてそれは純然たる町人階級のことで、唯町人の義理を強調してゐる外には何等の理想をも含まないのである。ところが、近松半二の「新板歌祭文」に入るに及んで、事件の面目が改まつてゐる。人物でも百姓の悴であつた久松が、相良丈太夫といふ武士の息子と變り、事件も亦武士階級に多い、主家の重

實が紛失して、その保管の責任の上から、丈太夫が自殺するが如き事件もあれば、又その重寶の捜索と、家の回復の爲に辛苦するといふ武士階級に起つたやうなこともあつて、世話物の世界、即ち町人階級の世界に、武士階級の世界が混じてゐる。即ち「秋の白しぼり」の純寫實性が失はれて、寫實と空想との混じかけたところの說話となつてゐる。これらから材を得たところの、「松染情史秋の七草」になると、事件は大袈裟となり、歷史の背景を帶びて來、更に偶然性が頗る多くなつて、市井の小事件たる性質が全く落ちてゐる。さうして珍奇、偶然なる事件の連續の中に、作者の腦中に空想してゐた通りに、最も便宜的に纏め上げられて事件の全貌が示されることとなつてゐる。それであるから、これを取つて「新板歌祭文」に比してすら、殆ど全く事件の狀貌を變へて、似ても似つかぬほどの關係となつてゐる。更にこれを「秋の白しぼり」や、原事實なるものに比すると、緣のあるのが不思議な位に思はれる。それほどに內容も、形相も全く變化されてゐるのである。

古來の傳說を題材とした馬琴の傳說物を見ると、概して因果應報物語であるから、一層作爲の跡が著しく、複雜な因果の緣を引いてゐる人と人との關係、事と事との關係は、到底現實のこととして受け容れ難いのである。その他史實に本づいた英傑一代記風の浩瀚な讀本の如き、餘りに人と事との偉大性を望んで、理想化、空想化の著しいところに、寫實の目を以て量り難いことが充ち滿ちてゐる。

かく人と事とを理想的ならしめんが爲に行はれた理想化、空想化の著しい他の一方には、文藝を遊戲、娛樂と解した爲に入れられた空想的要素が頗る多い。これは淨瑠璃や歌舞伎の時代物にもいへることである。即ち單に事件や、その變化の奇警乃至奇怪に、低級な興味を求めて、寫實の對象となる尋常平凡な事件や筋を嫌つたのである。江戸文

學は一般に遊戲的である中に、最もその性質の少いのを誇つたかに見える讀本に於てすら、この傾向は見逃し難いほど著しいのである。

以上二つの態度からして、讀本に於ては寫實性は貧弱で、何等その展開に貢獻し得てゐない。當時の江戸文壇では、町人文學の最高位を與へられて、作者もその作者たるを名譽としたのに、明治時代に降つては、殆どその價値の認められなくなつたのには、理由は一つならずあるが、寫實性を殆ど持つてゐないことが、その主なる理由として擧げられねばなるまい。明治時代以來創作界の主潮は寫實に在る。その寫實に最も緣の遠い爲に疎んぜられ、その價値が認められなくなつたことは否まれないのである。讀本を町人文學の持つ寫實性の上から見れば、他の小さな文學よりも下に置かれねばならない理由もこゝに在る。言ひかへれば、人生、人性の眞實を表し、又これを知らうとする要求に對して與ふべき摯實なる寫實の何ものを有しないといふところに、讀本の大弱點があるのである。

七　韻文學中の寫實の一瞥（特に川柳に就いて）

韻文學に於ける寫實性は一般にいつて少いが、殊に和歌には少い。和歌は依然として傳統の中にあつて、花鳥風月を詠み、戀愛を詠んだ抒情詩の領域を守つてゐたので、この方面に於ては寫實性に就いては多く言ふべきことがない。俳諧に於ては江戸初期の古風に次いだ談林の俳諧、殊に西鶴等の俳諧には多く見るやうになつてゐる。考證學者の山東京傳、柳亭種彥、喜多村信節などが、近世風俗史研究の資料にこれらの俳諧を多く引用してゐるのも、又現代の

近世文學註釋に盡力してゐる學者達が、やはりこれらの俳書を多く引用してゐるのも、これらの俳諧が當時の實際生活に密接して作られた爲である。さうして實際にこれらの資料が今や風俗志や、註釋に最も大切なものである。蕉風以後は、却てこの關係は逆轉したかに見えるが、それは談林に比して、自然に親しみ、引いて農村等の生活に親しみを持つて來て、都市生活に遠ざかつた爲であらう。

狂歌にも寫實性はないことはない。併しこれも和歌の抒情詩であるが如く、言葉上の滑稽に重きをおき、寫實を旨とすることが少いのである。

これらよりも、寧ろ寫實性の多いのは川柳である。川柳は窄ちの文學であり、又皮肉によつて滑稽を表した文學である。併し大多數は後者である。前者は主に寫實に依つて成つてゐる。固より最短詩形であるから、多くは想像を以て補はるべきである。

じれつたく師走を遊ぶ針とがめ
なげ入れの干からびてゐる間の宿
前垂で手をふく下女の取りまはし
縫紋を乳をのみ〳〵むしるなり
庵の戸へ尋ねましたと書て置

これらは、小さい景、小さな場所、小さな事柄の寫實である。さういふものが川柳の小詩形相當の題材である。必ずしも滑稽の句とは解し難い。これらには、又皮肉、諷刺もなければ、その興味は小さいものの有りのまゝなる寫つた寫實に在るといふべきであらう。

然るに又、

かみなりを眞似て腹掛やつとさせ
壁のすさむしりながらの實ばなし
管笠で犬にも旅のいとまごひ
米つきに所を聞けば汗をふき

などになると、輕い滑稽をおぼえるが、やはり寫實が主となつた句であらう。が又

上るたびいつかどしめて來る女房
ひよ〳〵の内は亭主にねだりよい
作頭は内の羽白をしめたがり
百兩をほどけば人をしざらせる
九郎介へ代句だらけの繪馬をあげ
おはぐろをつけ〳〵禿にらみつけ
ふり袖は言ひそこないの蓋になり
隅つこへ來ては禿の腹を立て
喰ひつぶすやつに限つて齒を磨き
小便に起きて夜なべをねめ廻し

などは、皮肉、諷刺を持つ、川柳最得意のものであるが、やはり寫實的な一面を持つものである。この寫實の一面を以て、人生に強く觸れて來る所がなかつたら、恐らく川柳は狂歌と同じく、我々に何の興も感ぜられぬものになつてしまつたであらう。

八　結　語

江戸時代に於ける町人階級は、その富力に由つて新に社會的勢力を得て、武士の權力階級をも壓するものがあつたに相違ないが、その德操、その學問、知識等に於ては未だ甚だ低級な域を脫し得てゐなかつた。唯所謂江戸趣味といはれた趣味性に於ては、大に進歩してゐたのである。從つて彼等の生活は一種の趣味生活となり、その生んだ町人文學もまた趣味の文學であつた。

高い情操を含むことも少ければ、深い思想や博い知識を見出すことも少いのであるが、そのかはりには、纖細巧緻なる趣味の味はふべきものを持つてゐる。時代を異にする我々に在つては、容易にその核心に迫つて、その趣味の眞髓を摑みかねるやうなところがある。この點では平安時代の文學に一脈相通ずるものがある。彼に在つては物のあはれであつて、これに在つては粹であり、通である。さうして、この粹や通は、一に町人文學の持つ寫實の上に表れてゐるものである。町人文學をよく知るには、その寫實的な言葉について詳細的確なる解を得ること、それを通して趣味を味解することを必要とするが、こゝには、かゝる見解の下に、寫實性の展開の一角から町人文學を概觀するに止めて、その纖細なる趣味の解說には及び得なかつた。が併し、この稿は一先づこゝに筆を擱くこととする。

昭和九年十一月二日印刷
昭和九年十一月六日發行

岩波講座 日本歷史
第十四回配本 四

國史研究會同人代表
編輯者 黒板勝美
東京市神田區一ツ橋通

印刷兼發行者 岩波茂雄
東京市神田區美土代町

印刷所 三秀舍

製本 寺島

版權所有

PL
726
.4
F8

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 7125